米国の造園教育を考える

上 杉 武 夫*

by Takeo UESUGI*

はじめに

アメリカ造園教育の基準が、1928年ASLA（アメリカ造園家協会）とNCILA（全国造園教育者連合）との合同会議の中で設定されてより45年間、各大学のカリキュラムの基本にされてきたが、ここ5年間、社会的、環境の変化に対応するべく新しいスタンダードが考えられつつある。

本レポートは、数年来議論の対称になっている造園教育に関するコア・カリキュラム（中心的教科目）を御紹介すると共に、筆者の体験をまとめて御参考に供したいと思う。

ライセンス制度について

1953年、始めてカリフォルニア州で造園家の免許制度が設定されてより、ニューヨーク州・マサチューセッツ州が続ぎ、最近ではハワイ州でもとり入れられた。

免許制度は誰が認定するのかということに多くの問題点ををはらんでいるが、現在、カリフォルニア州では知事の管轄下に6人のボード・メンバーがあり、その構成は一人を除き全て民間人である。1年に2回の科目よりなる試験が行なわれ、各科目について75%が最低点となっている。大学のカリキュラムがどうしてもこのライセンス制度を抜きにして考えられない処にアメリカの造園教育の一つの問題点があるわけであるが、一方、制度的には、社会的な職能位置づけに大きく貢献している。ライセンス制度はもともと市民保護の観点から生まれたものであるが、結果的には、建築家、都市計画家との機能分割に役立っている。大学の教科目は、通常このライセンス試験つまり州の要請に大きく関連し、同時にASLA（国レベル）がセットした基準に合致しなければならないという二重の目的が課せられている。つまり技術的、理論的水準が州と国によってコントロールされているわけである。

なぜコア・カリキュラムが議論されるのか

毎年、造園専攻者が増加し、ライセンスを持った新し

い造園家が次々に誕生する中で、同時に進行する環境破壊、都市のスラム化、社会的混乱などに一体造園家はどのように対応しているのか、という問いから出発する。造園教育の量から質への変革は、生態学的、環境的危機が叫ばれ、エネルギー欠乏を身にしみて体験した1970年代の初期現象に全く期を一にしている。一方、造園家の職能分野が余りにも多岐多様になり、雑学的要素を強め過ぎたことが教育反省への転機ともなっている。小さな庭のデザインから、都市設計、地方土地計画へと移行する線的、面的関係は明瞭でも、それでは一体造園家は何かをするのかという問いに、とりわけ学生は自信をそう失し、造園教育の核心が追求され出したと言える。

拡げることはいとも簡単だが、それは逆に造園家のスペシャリストとしての責任性を問われる結果に終ることは至極、当然の理屈であろう。

1974年のASLAとNCILAの合同会議で、中心的教科目を考えるたたき台になった項目をここに列挙すると、環境史、造園工法、植栽デザイン、資源分析、環境評価、デザイン、造園実務、であり、これらが従来からとられてきた、教科目基準とそう変りなく、何故、再検討しなければならないかという処に、アメリカ造園界、ひいては教育界の問題点がひそんでいる。

数年まえからEIR（Environmental Impact Report）と呼ばれる環境の衝撃調査が殆んど商業的、公的開発に課せられるようになり、コンサルタント業の大きな事業内容になっている。その主な内容は調査であり、分析である。経済的、社会的、政策的分野が自ら強調され、造園家はプランナーになるべきか、デザイナーになるべきか、という断片的で余り意味のない問題提起が出されていた中で、従来のカリキュラム基準を再確認して肉をまき、ランドとの、植物社会との関係を高く評価してデザイン基調型を打ち出したことは、建築家やプランナーとの協調を考慮してのことではないかと思われる。

造園教育の可能性と問題点

造園学科が環境デザイン学部へ属し、建築や都市計画学科、デザイン学科とたえず交流を図るということはカリキュラムを考える上で必須と思われる。しかし、一方林学的、農学的、植物学的知識の放棄につながる可能性も多分に存在する。この辺に形を整えてしまうことの危

* Assis. Professor

Dept. of Landscape Architecture

School of Environment Design

Calif. State Polytechnic University, Pomona

険性があり、造園独自の基本的カリキュラムをどこまで考え、どの辺で他学科と協調してゆくかという問題が残るわけである。

筆者の在籍している大学では、殆んどどの学生がどこかの短期大学で芸術や農学を専攻し、入学してくるのであるが、最初の2年間は、建築、都市計画の学生と一緒に環境デザインを学習することになっていた。処が、果して、3年に上ってきた時には、実に中途半端な能力しか持ち合わせないケースが多く、昨年よりこのミックス期間が一年に減らされた。これは、デザイン協調の観点から逆行するようであるが、各学科共に独自性を考慮しての結果である。

従来エコシズムの導入が叫ばれ、現在もその公式化に努力が払われているが、多くの場合、コンピューター導入と裏腹で、切り捨ての理論がデザイン教育上弊害を起している。生態学の取り扱い方に先づ問題があるようであり歴史学的、文化史的視点の欠除にも原因している。

造園家が何かが出来ると思っている内に、都市開発、経済開発という、巨大な怪物に何もかもとり去られてゆ

く。自然池、生産緑地、河川など全てのオープン・スペースが人工化されつつある現実を目を向ける時日本もアメリカもさして変りはなさそうである。ランドスケープと経済、社会、政治との関わり、そのメカニックを知ることが実に重要である。しかしそれ以上に感性と創造性豊かな造園家づくりに再度歩を進めた米国の造園教育を筆者は静かに見守り、又実践したいと思っている。

おわりに

日本の国土と文化的遺産は必ず造園教育にとって最適だと信じている。歴史的に未だ若い米国で本当の造園教育がなされるかどうか疑問視する一人であるが、そのアプローチの仕方、オーガニゼーションの仕方に優れた技法がとり入れられつつあり、怠け者の筆をおして、これを機会に、お伝えしようと思っている。

参考文献

1. ASLA: "Core Curriculum" September 1974
2. ASLA: "History of Landscape Architecture Department in American University" January 1973

《書 評》

スコープリポート「環境アセスメント——原則と方法」

(島津康男訳 菊判 ¥1,200)
環境情報科学センター発行

最近、環境アセスメントという言葉がよく使われるようになってきた。その概念および方法等についてわが国でも各種の機関、委員会で検討されているが、1つのまとまった手引き書として今までに公にされたものはなかった。

本書は国際学術連絡会議(ICSU)の中に設けられた環境問題に関する科学委員会(SCOPE)が、各国の実情に鑑み、特に政策決定者や計画の責任者に参考になるように書かれたものである。

環境アセスメント(EA)は人間の行動が環境を変える恐れがある時にどのようにすべきかを評価し決定するための行動であり、また、環境影響評価(EIA)は環境の変化に関する情報を確認し、予測し、分析し、公表する行動とされているが(国連環境計画の定義)、本書の内容は後者のEIAに関するものである。

環境への影響評価に際して、3つの時間的スケール(建設中、完成時点、その後の数十年)と3つの空間スケール(身のまわり、地域、大陸および世界全体—最後の空間スケールは本書の対象外)を考え、代表的

な影響評価の方法としてレオポルド・マトリックス、オーバーレイ、バトル・システムを取り上げて説明している。このうちのいくつかは、わが国でも既に試みられているものであるが、問題は訳者がはしがきの中で触れているように日本における特殊な実情すなわち特に事後評価の遅れ、公表・審査の段階の欠除であろう。たとえどのようにすぐれたモデルと方法によって事前評価が行なわれたとしても、公表、モニタリングが不十分であればそれは片輪といわねばならないであろう。本書ではこの点について強調されていることは重要である。

環境アセスメントの方法というタイトルから、手法の細部についてまでの期待を本書に抱くのは本書の啓蒙的趣旨からいって無理なことであり、それは別の機会を待つべきであろう。むしろ本文の中でよく触れられている生態学的開発(長期的な損失を最小にするという考えを基礎にしている)の計画までが環境アセスメントの範囲に含まれるとする点に注目したい。この具体的展開は今後の重要課題であろう。

(井手久登)